

メルロ=ポンティ政治哲学における歴史の意味と偶然性の問題

山下, 通
九州大学文学部 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1446192>

出版情報 : 哲学論文集. 46, pp.65-80, 2010-09-25. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

メルロ＝ポンティ 政治哲学における

歴史の意味と偶然性の問題

山下 通

序

本論の目的はメルロ＝ポンティの政治哲学と『知覚の現象学』等で論じられる知覚論・身体論との関連を明らかにすることにある。考察に際しては『ヒューマニズムとテロル』、『弁証法の冒険』などの政治論的著作、そして Sonia Krus の *Communication and conflict* (in *Merleau-Ponty Critical Essays* edited by H. Pieterma, University Press of America, 1989) 等を主に参照する。

以下本論で明らかにされる点は次の二点である。メルロ＝ポンティ政治哲学の骨格をなしているのは、身体論、特に我々がこの「私の身体」によって世界と分かち難く内属的に関係し合つたという「世界内存在 [l'être au monde] の議論と、『世界の散文』等で扱われるコミュニケーションの議論である。歴史における意味＝方向 (sens) の議論と政治哲学との間の齟齬、特に彼のマルクス主義解釈においては、歴史は或る種の目的論的様相を帯び、偶然性が介入する余地がなく、また場合によつ

ては、歴史における目的の為に「暴力」が容認される可能性もある。

また、本論の最後では、『ヒューマニズムとテロル』での政治的態度に対してメルロ＝ポンティが『弁証法の冒険』で行なった自己批判に言及し、彼の政治哲学が拒否したもの、そして維持し続けたものについて、今後考察すべき問題と共に示したい。

1. 世界内存在＝暴力に巻き込まれた存在

メルロ＝ポンティの『ヒューマニズムとテロル』で描かれる世界像は、例えば次のような箇所からも伺えるように、一貫してきわめて悲観的かつ厳しい現実認識がその基調をなしている。

歴史が闘争であり、合理主義それ自体が階級イデオロギーであるということが真理なら、カントが言うような『善意』すなわち、乱戦を超越した高みからの普遍的道徳に訴えることで直接人間たちを結びつける機会は全くない。¹⁾

書かれた当時特有の時代的背景を考慮に入れたとしても、いささか教条的とも形容しうるまでに「マルクス主義」的な文言が著作中に見受けられることは否めない。『ヒューマニズムとテロル』における彼の筆致は、マルクス主義的姿勢に徹するそのスタイルの延長上に、暴力の容認とも解釈しうる地点まで進んでいく。

マルクス主義が暴力の理論であり、テロルの正当化であるとしても、それは没理性から理性を出来させるのだし、マルクス主義が合法化する暴力は、それだけです。この暴力と退行的暴力とを区別させるような徴を伴っているにちがいない。²⁾

すなわち、理性を生起させるためであればテロルは正当化され、そしてテロルを正当化するための「暴力の理論」としてのマルクス主義は、ある種の暴力を合法化する。そして、この合法化された暴力は合法化されざる暴力¹¹、「退行的暴力」とは明らかに区別されると言うのである。しかし、「ここですでに次のような疑問が生じる。一つは、暴力の理論によって成立する「理性」とは何かという疑問である。そもそも暴力とは非理性的なものとしてカテゴリー化される性質のものではないのか。そうだとすれば、非理性から生じる理性とはどのようなものか。そして二つ目は、何を以って暴力を合法化されるべきものと合法化されないものか、つまりここで言われている「退行的なもの」とに区別するのかわという疑問である。この二つ目の疑問についてはさらに、もし区別がなされるとして、誰にそのような権利があるのか、そして、そもそも暴力が合法化されるとはどのようなことを意味するのかわという疑問が新たに生じるであろう。

「合法化された暴力」の問題に関して、我々はその具体的なイメージとして「法」や「制度」、そしてそれに基づく処罰や規制といったものを経験的に連想するかもしれない。しかし、メルロ＝ポンティが次のように言つとき、世界内存在として規定される我々は、それが合法的であるか否かという問題以前に、暴力の内に不可避的に絡め取られている。

「この問題（暴力という問題）は、そもそも初めから世界の中に、言い換えるならば暴力の中に巻き込まれた意識にとつてのみ提起され、それゆえ、ユートピアを越えたところでしか解決されない¹²。

言うまでも無く、メルロ＝ポンティにおいて人間は、「いつも世界に内属して在り¹⁴」そして同時に「あまりにもびつたりと世界の中に取り込まれてしまつてゐる¹⁵」という仕方では存在する者として定義されている。『知覚の現象学』における、こうした人間に対する世界内存在という定義づけは、『ヒューマニズムとテロル』では「暴力の中に巻き込まれている」という言い方で捉え直される。つまり、『知覚の現象学』で語られた「世界内存在」とは、同時に「そもそもはじめから暴力の中に巻き込まれ

た存在」なのである。

『眼と精神』や『間接的言語と沈黙の声』等に見られるようにセザンヌやブルーストの言葉を引用しつつ、ときには美的過ぎるという印象を抱かせるほどの筆致で細密に論を進めていくメルロ＝ポンティが存在する一方で、『ヒューマニズムとテロル』に見られるように、マルクス主義的な断言とともに暴力を前面に打ち出すメルロ＝ポンティが存在している。仮にどちらが本物のメルロ＝ポンティなのかという問いを提出してみても、そうした問いは、つまり暴力的なメルロ＝ポンティと美的なメルロ＝ポンティではどちらがオリジナルなメルロ＝ポンティなのかという問いは、おそらくそれほど重要ではないであろう。例えば、必ずしも政治的テーマが中心的に論じられているわけではない『知覚の現象学』においてすらも、序文に次のような言葉を見ることができる。⁶⁾

われわれは自分の運命を手中に握っており、われわれは反省によって、しかしまた同じく自分の生命をかけた一つの決意によって自分の歴史に責任を負う様になるのであって、この反省と決意の双方とも、問題になるのは実践されることによって口を確認する一つの暴力的な行為である。⁶⁾

われわれは思惟や反省によってのみではこの世界や歴史に参加することはできない。身体を持った存在者である以上、場合によってはその命をかけた決意と実践を以って歴史の問いかけに応答し、暴力を為す存在となり得るということを、責任と共に引き受けなければならない。それは暴力の元に曝されるという受動性と、自分自身が暴力を為すという能動性とが常に反転可能であるということを意味している。この「世界の内に在ること＝暴力の内に巻き込まれること」というテーゼは次の言葉に集約される。

われわれは純粹さと暴力とのあいだで選択するのではなく、多様な種類の暴力の間で選択するのである。われわれが受肉しているかぎりでは、暴力とはわれわれの宿命なのだ。⁷⁾

2. 闘争とコミュニケーションの両義性

メルロ＝ポンティの哲学においては知覚や身体性の問題を扱った部分だけが考察に値し、彼の政治哲学については、結局のところ時事評論的で瑣末なエッセイの域を出ないという理由で無視するという選択肢もあるかもしれない。しかし、そのような選択をしない場合は、知覚、身体という言葉で語られる哲学と政治哲学とのあいだに、密接な関連性ないし影響関係を見出さなければならぬ。言い換えれば、彼の哲学全体において政治の問題がどのような意味を持つのかを明らかにしなければならぬ。

S・クルクスはその論文の中で、メルロ＝ポンティの政治的理念は彼の哲学全般に究めて深く根ざしており、前者を理解するためには後者の理解が必要であると述べている。⁸⁾ 続いてクルクスは、『ヒューマニズムとテロル』における政治哲学と、『弁証法の冒険』における政治哲学とのあいだに変化があり、この変化はメルロ＝ポンティ研究者が中期と呼ぶ時期以降、つまり『知覚の現象学』の中の「語られた言葉 parole parlée」「語る言葉 parole parlante」という表現に代表される言語行為中心の言語哲学から、ソシユールについての講義を経て、制度あるいは言語体系としてのlangue中心の言語哲学へとシフトした時期と重なると考えている。⁹⁾

しかし、その一方でクルクスは、メルロ＝ポンティの政治哲学を特徴付ける最もオリジナルな部分というのは、実は一九四〇年代の初期の論考の中に既に読み取れるとも主張している。¹⁰⁾ ところでこの最もオリジナルな部分とは、「政治的な生を闘争とコミュニケーションの両義性として把握する」¹¹⁾ という言い方で定義される。¹²⁾ つまり、メルロ＝ポンティの政治哲学を「闘争の

哲学』としてのみ規定することも、「コミュニケーションの哲学』としてのみ規定することも、その本質を捉える上では不十分であり、あくまで闘争とコミュニケーションの両義性として捉えること、さらにいえば、闘争とコミュニケーションとが紙の裏表のように切り離すことが出来ず、闘争というかたちをしたコミュニケーション、コミュニケーションすることそれ自体が闘争であるような関係として捉えることが必要なのである。この両者の両義的で反転可能な関係、絡み合いこそがメルロ＝ポンティ政治哲学の本質をなす。

しかし、闘争とコミュニケーションという一見すると対立しあう項が両義性を形成する事態とは一体どのようなものなのか。我々はどのような局面を具体的にイメージし得るであろうか。例えばメルロ＝ポンティは、コミュニケーションの場面において、「われわれを不意に襲い、その方向を狂わせる」ような「暴力的な運動」をパロールの本質として見出している。対話という場面においては、言葉と言葉とが対話者同士をまったく予期しなかった方向性へと導いていく。しかし、その方向性それ自体——は対話者のコントロールできない次元のものであり、その意味では偶然性に支配されている。その言葉の意味内容だけではなく、その言葉が発せられた状況、言葉を発した者の身振り、声の抑揚を地として浮かび上がる言葉によって、対話する両者の関係が大きく改変され、そこに対立や闘争の関係が生起することは我々の経験からも十分にイメージできる。

3. 他者との弁証法的関係

そう考えるならば、ここで次のような疑問が生じる。メルロ＝ポンティの言う政治的状況とは、対話といった日常的状況を含むものとして捉えてもいいのか。だとしたら、われわれの生のほとんどすべてが政治的なものとして規定できるということになる。しかしそうすると、何を以ってメルロ＝ポンティの政治哲学を、その知覚・身体の哲学に代表される彼の哲学全般から際

立たせることができるのか。つまり、メルロ＝ポンティが著作の中で通常使っている幾つかの用語を、例えば身体や肉といった言葉を政治的文脈上の言葉に言い換えたただだとすれば、メルロ＝ポンティの政治哲学そのものの存在意義そのものが疑わしいものとなってしまつてあつて、クルクスがメルロ＝ポンティの政治哲学を、その哲学全般に対して周辺のなトピックや意味の無いものとする解釈を斥け、知覚の哲学や後期存在論と密接にリンクしていると主張していることには同意できる。しかし、政治哲学と他の主題のものが相互に他方の単なるヴァリエーションであると結論つけてしまつたら、それは結局、メルロ＝ポンティの政治哲学について何も言っていないことと同義であらう。問題はメルロ＝ポンティの政治哲学が彼の身体論に代表される哲学とどう呼応し、もし整合しない部分があるとしたら、それはどのような部分かということである。

筆者は、むしろ彼の政治的著作と他の著作のあいだには、ある種の断絶、結びつかない部分があると考えている。しかし、まずはメルロ＝ポンティの知覚論ないし身体論が政治哲学とどのようにリンクしているのかを確認しておこう。『知覚の現象学』の「他者と人間的世界」のなかの次の言葉がヒントになる。

私は単に物理的世界しか持たないわけではないし、単に大地や空気や水からなる環境だけに生きるわけでもなく、自分のまわりに道路や並木、村、街、教会、様々な道具……といったものを持っている。こつた対象のそれぞれはそれを役立てる人間の行為の烙印を刻まれている。つまり、それぞれが人間性の雰囲気(15)を漂わせている。

私の感覚経験の起源というものを考えたとき、それを「私の意識による構成」と簡単に言つて済ませることは出来ない。行為や文化的対象のうちに沈殿した何か、雰囲気や気配のような何かが、「私」による構成以前に、つねにすでに存在している。しかし、その先行するものは何かといえは、そこに明確な答えはない。それ自体彼のものであると特定できない無名性のうちでこそ感覚経験は生じる。

どんな知覚も一般性の雰囲気の中で生じ、無記名なものとして我々に与えられる。…私は「ひと」のなかで知覚するのであって、私が知覚するのではない。¹⁶⁾

かといって、「私」が「ひと」のなかに消失してしまう無意味な存在なのかといえば、そうではない。このことは次の言葉からも伺える。

感覚的探索の中で現在に過去を与え、それを未来へと方向付けるものは、自律的な主体としての私ではなく、一つの身体を持ち、また まなざす すべを心得ているかぎりでの私なのだ。¹⁷⁾

私は知覚経験において、実は「無記名なひと」「ひと」という一般性を通過している。知覚するのは私ではないという意味は、「ひと」のなかにある「私」というかたちで、「私」という主観性の源初性を否定するプロセスを知覚は必ず経るといふことである。「私」という主観の揺ぎ無き独自性と呼ばれるものは、むしろこの「無記名なひと」「ひと」によって生じた経験から事後的に構成されたものにすぎない。しかし、そのとき知覚するのは、まなざすことができる身体をもったこの私ではないこともまた事実である。つまり、この二つの引用でまったく反対のことが言われているように見えるとしても、実は相補的に二つのことが言われているのである。「私」が否定されるとしても、その「私」とは過去や自身を取り囲む人間の雰囲気から切り離された純粋な「主観としての私」なのである。しかし、知覚する「私」とは、そのような純粋な存在ではなく、身体を持ち、街路や道具、人間の行為の痕跡が刻まれた人間性の雰囲気浸され、つねにすでに「ひと」という無名性と共に存在する「私」なのである。

確かに、身体を持たなければまなざすことはできない。しかし、私は身体をもっているといつ、まなざすことによって、他

者のまなざしの下では「対象」へとなりさがってしまつ可能性を同時に孕んでいる。だが、「共に存在する」という表現に調和的な意味合いだけを見出すのは、あまりに楽天的に過ぎるであろう。共に存在するが故の他者との相克、闘争的關係は不可避である。

4. 歴史の現実的な主体としてのプロレタリアート

前章で述べられたことからは、「ヒューマニズムとテロル」では次のように言い換えられている。

歴史は本質的に闘争——主人と奴隷の闘争、階級闘争——である。それが人間の条件の必然性であり、人間が分かちがたい形で意識でもあり身体でもあること、無限でもあり有限でもあるというこの根本的な逆説によるものである。受肉した意識の体系においては、それぞれの意識は他の意識を対象に還元することでは、自己を肯定することができない。¹⁵⁾

メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』において、生きた経験を数値化し対象化する客観的思考を「二次的なもの」として批判したことは周知の事実である。その彼が、他の意識を対象化すること、すなわち自分自身と同様に「この世界のうちに存在し、受肉した存在である他者を対象化する」ということを「人間の条件の必然性」とすることは、ともすると『知覚の現象学』における自らの立場を裏切っているかのようと思われる。しかし、こうした記述は、自分達の状況を描き出すに当たって、まず悲惨な状況、彼の言葉を借りれば、「死に至る抗争と戦い」¹⁶⁾を描き出すというマルクスの方法に則したものであり、メルロ＝ポンティの意図はあくまで対象化への抵抗にある。そして、その抵抗のためにメルロ＝ポンティが依拠するのがマルクスの思想であり、メルロ＝ポンティは、すくなくともこの時点では、マルクス主義こそがこうした対象化との戦いを解決する唯一の方法

だと考えていたのである。

では、具体的にはどのような抵抗の形が思い描かれているのか。メルロ＝ポンティは再三にわたって、経済決定論、あるいは哲学的諸問題を経済的問題に還元したという俗流のマルクス主義を非難し、むしろ経済決定論というマルクス主義へのレッテル貼り自体を無効化しようとする。

マルクス主義が提案するのは人間の共生の問題をラディカルに解決することであり、絶対的な主観性による抑圧、絶対的な客観性による抑圧、自由主義によるみかけだけの解決を超える解決を示すことにある。⁽²⁰⁾

ここで引いた部分にくわえて、この章のはじめに引用した部分の数行前にヘーゲルの「それぞれの意識は他者の死を追求する」という言葉が引かれていることからわかるとおり、メルロ＝ポンティの政治哲学はその大筋においてヘーゲル＝マルクス主義の様相を帯びたものであることは否定できない。いまはそのことの是非について問わないでおくとしても、「それぞれの意識は他者の死を追求する」という「人間の条件の必然性」への抵抗としての効力を、マルクス主義に期待していることは確かである。

マルクス主義の本質的課題は、人間的未来へと己を乗り越えていくような暴力を追求することであろう。マルクスは、プロレタリアートの暴力、言い換えるならばこの階級の人間たちの権力のうちに、この種の暴力を見出したと信じた。⁽²¹⁾

そして、プロレタリアート——他の箇所では「人間性を実現できる立場」⁽²²⁾、「真の人間の共存の始まり」⁽²³⁾と呼ばれる存在——こそが、こうした対象化への抵抗を担う存在であるとメルロ＝ポンティは言っているのである。

5. 歴史の意味と偶然性

プロレタリアートは、彼らがプロレタリアートであるというまさにその理由において、その暴力は正当化される。

策略、虚偽、流された血、独裁は、それらがプロレタリアートの権力を可能にする場合にその限りでのみ正当化される。⁽²⁴⁾

しかし、メルロ＝ポンティが描き出す、革命の理想的主体としてその暴力が容認されたプロレタリアートという人々をわれわれは今日認めることができるであろうか。むしろ、それを革命の主体と呼ぼうが、人間性・人間的共存を成就しうる存在と呼ぼうが、何かしら特別な——特権的と言ってもいいような——意味合いを持ったグループや個人を英雄的に規定するということ自体が危険を孕んではいないか。問題はそれだけではない。前節で挙げたようなマルクス主義的問題設定・プロレタリアートの役割が歴史において或る sens (意味＝方向) を持ち、しかもそれが唯一の sens (意味＝方向) として描かれているところに、メルロ＝ポンティの政治哲学が彼の哲学全般に還元し得ない部分、言い換えれば整合しない部分があると考えられる。

sens (意味＝方向) を持つものとして歴史を捉えるメルロ＝ポンティの姿勢は、『知覚の現象学』から晩年の『見えるものが見えないもの』にいたるまで変わらない。しかし、この sens (意味＝方向) とは誰が定めるものなのか。

われわれは歴史に sens (意味＝方向) を与えはするが、しかし、そのことは、歴史がわれわれにその sens (意味＝方向) を提起することなしにはなされない。…だからこの歴史の主体は個人ではない。⁽²⁵⁾

この引用からも分かる通り、歴史に *sens*（意味＝方向）を与えるのは個人ではなく、故に、マルクスやメルロ＝ポンティでも勿論ない。もしわれわれが歴史に *sens*（意味＝方向）を与えることができるとすれば、それに先立って歴史の示す *sens*（意味＝方向）を受け取ることによってでなければ不可能なのである。ここには個人の判断や決断といった定立的意識の次元とは別の、偶然性の次元が存在する。歴史と偶然性の関係は「哲学をたたえて」のなかで端的に次のように規定される。

人間の出来事の偶然性は、いまや歴史論理の中の欠陥のようなものではなく、むしろ歴史の論理の条件となる。²⁶

このように歴史は論理性と偶然性との両義性として規定されている。われわれの認識や知覚が生理的構造からのみ説明できないのと同様に、歴史や政治を経済によって因果論的に説明することも出来ない。しかし同時に、われわれは常に既に世界に内属しており、世界を超越した純粹主観たることも出来ない以上、あらゆる活動のうち経済や政治の影響を受けざるをえない。このように、歴史には *sens*（意味＝方向）があるという、終始一貫して変わらないテーゼを主張するにもかかわらず、ヒューマニズムとテロル²⁷におけるメルロ＝ポンティは、ヒューマニズムとしての社会主義あるいは共産主義が歴史的現在の論理または *sens*（意味＝方向）を体现している²⁸と考えることによって共産主義的理念に絶対的性格を与えてしまふ。その名目が真の共産主義世界の成立であれ、革命の成就であれ、ある特定の歴史的テロスが設定されるかぎり、テロスの実現という大義名分の下にあらゆる暴力が正当化あるいは黙認される。歴史は目的論的必然性を帯びる結果となる。つまり、メルロ＝ポンティは、歴史の持つ *sens*（意味＝方向）の偶然性の意義を主張しながらも、政治哲学においては、その暴力を容認するまでにプロレタリアートの存在意義を絶対化し、マルクス主義的な闘争という *sens*（意味＝方向）を唯一にして必然的な歴史の方向としてしまふことで、政治哲学と自身の歴史哲学とのあいだに矛盾を生じさせている。

最後に

メルロ＝ポンティの政治哲学は、随所で歴史を支配する偶然性を肯定しながらも、プロレタリアートによる革命と救済という単一的な歴史の可能性を重要視するあまり、マルクス主義的な目的論的世界観に閉じてしまう可能性がある。それがどのような立場であつても、ある思想的・党派の命題の是非だけが問われ、唯一の目的論的世界観が提示されることで他の命題に関する議論や反証の可能性が排除されるとすれば、それは全体主義へ至るプロセスそのものになる可能性がある。

クルクスがメルロ＝ポンティの政治哲学の特徴を「闘争とコミュニケーションの両義性」と定義したことは意義深い。しかし、メルロ＝ポンティが歴史の *sens* (意味「方向」) を偶然性として捉えながらも、マルクス主義的歴史の *sens* (意味「方向」) を一義的な必然性として捉えた点に彼の政治哲学と哲学全般とのあいだに齟齬を生じさせ、ともすると暴力の肯定と全体主義へと転じる可能性があることもわれわれは指摘しておかなければならない。

『ヒューマニズムとテロル』における自身のマルクス主義解釈ならびに自身の政治的態度については、一九五五年の『弁証法の冒険』の中で次のように言及している。メルロ＝ポンティはマルクス主義を絶対化する解釈を自己批判的に乗り越えようとするのである。

なにをしても真理であり、証明と検証なしで済ませるこのマルクス主義は歴史哲学ではなかった。それは偽装したカントだったのであり、われわれが絶対的行動としての革命のうちに見出したのもまた、カントだったのである。⁽²⁹⁾

かつての自分自身が示したマルクス主義理解を、「なにをしても真理であり、証明と検証なしで済ませるこのマルクス主義」

としてその形式主義的性格を断罪するのだが、このことは以後のメルロー・ポンティがマルクス主義の一切を否定したということの意味してはいない。『弁証法の冒険』においては、マルクス主義の理念だけを観念論的に擁護し続けることの不可能性、そして、資本主義にも社会主義に依拠せず、むしろどのような政治的態度に関しても懐疑的態度を貫くと同時に、どのような政治的理念も絶対化しない「非 共産主義 a-communism」⁽³⁾ が論じられる。

しかしながら、どのような政治的態度に対しても懐疑的で、なおかつ絶対化を拒否するという態度が、具体的にはどのようなものであり、どのような実際的な効力を持ちうるのかという疑問が生じることは否めないが、『ヒューマニズムとテロル』と『弁証法の冒険』とのあいだに政治的転向ないし断絶が存在するかという問いそれ自体がすでに非常に大きい問題であり、本論の問題設定を超えている為、その問題についてここで詳論することはできない。しかし、特定の政治的理念だけを絶対化しないという姿勢それ自体は、実は『弁証法の冒険』で始めて語られたものではなく、むしろ『ヒューマニズムとテロル』とほぼ同時期の『マルクス主義をめぐって』(一九四六)や『マキャベリ覚書』(一九四九)等の内にすでに存在し、なおかつこの姿勢は以後メルロー・ポンティ政治哲学に一貫して存在するものであって、この問題を「転向」や「断絶」といった言葉で簡単に論じることは出来ない⁽⁴⁾と筆者は考えている。この問題については、「ヘーゲル以後の哲学と非 哲学」等、マルクス主義を扱った晩年の講義録⁽⁵⁾も含めて考察することが今後の課題である。

註

- (一) Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, p.123 (151) 引用に関してはメルロー・ポンティのテキストから訳出したが、適宜みずす書房版による翻訳も参照した。以下 引用については原書ページ数の後の括弧内に翻訳のページ数を付す。また、例えば(1-33)と表記された場合は、前の数字が翻訳による巻数を、後の数字がページ数を示す。

- (2) *ibid.*, p.119 (148)
- (3) *ibid.*, p.127 (158) 括弧内は筆者補足
- (4) Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. (1-7)
- (5) *ibid.*, p. (1-14)
- (6) *ibid.*, p. (1-24)
- (7) Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, p.127 (159)
- (8) Sonia Krusks Communication and conflict, in *Merleau-Ponty Critical Essays* edited by H.Pieterma, University Press of America, 1989, p.178
- (9) 「ロジクマンウスが描き出したメルロ＝ポンティ言語哲学の変遷と概念は「われわれの形式的なものと異なる」と認められる。言語行為 *parole* 中心の時期と規定された「知覚の現象学」でも「われわれは言語が制度化している世界の中に生きている」や、「手持ちの意味」つまり過去の表現行為の集積が語る主体たちのあいだに一つの共通世界を確立しており…言葉の意味とはこの言葉がこの言語世界を使っている仕方、あるいはその言葉が既得の意味という難題の上で転調する仕方、以外の何もでもない」といった記述が見られる。この「パロールとラング」、言語行為と制度の関係はすでにメルロ＝ポンティの言語哲学の早い段階ですでに登場している。
- (10) *ibid.*, p.179
- (11) *ibid.*, p.179
- (12) *ibid.*, p.179
- (13) Merleau-Ponty, *La Prose du Monde*, Gallimard, 1969, p.127 (159)
- (14) *ibid.*, p.198 (188)
また「メルロ＝ポンティにおける対話・コミュニケーションの問題については拙論「対話と他者——メルロ＝ポンティにおける対話の意義——」（西日本哲学会年報 第14号 西日本哲学会 2008）も参照していただくことが幸甚である。
- (15) Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p.399-400 (2-209)
- (16) *ibid.*, p.249 (2-21)
- (17) *ibid.*, p.277 (2-56)

- (18) Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, p.129 (150)
- (19) *ibid.*, p.122 (151)
- (20) *ibid.*, p.122 (151)
- (21) *ibid.*, p.13 (8)
- (22) *ibid.*, p.129 (161)
- (23) *ibid.*, p.130 (162)
- (24) *ibid.*, p.14 (9)
- (25) Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p.513 (2-364)
- (26) Merleau-Ponty, *Élog de la Philosophie*, Gallimard, 1953, p.54 (241)
- (27) Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, p.143 (181)
- (28) *ibid.*, p.128 (160) の「*なるもの*の暴力を糾弾するより、その者は正義と不正義が存在する領域の外に身を置き、世界と人類を呪うのだが、これは欺瞞的な呪いである。なぜなら、この呪いの言葉を口にすると、すでにそれまで生きてきた以上、すでに「このゲームの規則を受け入れているのだ。」という言葉は、正義を語り、暴力を糾弾することそれ自体が、すでに暴力を含んでいるのではないか、そして、世界内存在として規定されるわれわれの誰一人として無実であり無垢な者などいないのではないか」という「正義」についての問題を提起している。本論ではメルロ＝ポンティの政治哲学が暴力の容認に繋がる危険性を強調したが、正義とは何か、暴力とは何かという問いもメルロ＝ポンティの政治哲学を構成する重要な要素の一つであると思われるが、これらの問題については稿を改めて考察する。
- (29) Merleau-Ponty, *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955, p.321 (318)
- (30) *ibid.*, p.257 (256)
- (31) Merleau-Ponty, *Philosophie et non-philosophie depuis Hegel in Notes des cours au Collège de France: 1958-1959 et 1960-1961*, Gallimard, 1996

(本学文学部・非常勤講師)